安心としては厭離する心を持つことが先であり、起行は欣求するための行が先であるべきとする。人間の心理がよく表れている言葉である。

いずれにしても仏教の行者としての持つべき安心起行、それにここでは触れないが、願行具足をその教学として固持しているのである。

第三項　証空の三部経釈と三心

証空の往生の安心である三心を解釈していくうえで、まず理解しておかなければならないことは証空の『観経』の見方である。

最も端的に述べられているのが『蜜要決』にある、

一者至誠心是安散之機為二経序一二者深心是念仏為二経十三観一三者回向発願心是来迎也為二経三善義一三心以レ有二十六字一為二一経一耳

（『浄全』八、二八四頁下）

という文と『観経』の、

皆開三二心一故序為至誠心一定為三深心一散為二回向心一回向心為レ体深心為レ名至誠心

（『浄全』八、二九五頁下）

為レ機ト而已

という部分であろう。これに見られるように、証空は『観経』そのものに三心が顕されていると考えているのである。また『秘決集』巻第十七には二河白道を解釈して、「白道者。指二別所求之土一。即観経是也」（『西全』一、三七一頁下）と言い、その道と五千、七千ある諸経典の巻数に対して、ここでは『観経』一巻のみが救済の道となっていることを説明し「清浄願往生心者指二観経一也」（『西全』一、三七二頁上）と締めくくっていることからも証空の考えている『観経』の重みがわかる。

このような『観経』の捉え方が、あとで問題にする三福と三心の関係や、菩提心の見方を複雑にしているとも言える。

次に三経の関係であるが、『秘決集』巻第十七（『西全』一、三六四頁下）では三部経を仏法の始中終に当てはめ、『無量寿経』すなわち弥陀の四十八願を仏法の始、『観経』を中、『阿弥陀経』を終として、

浄土宗者。引二三経一者。依二弥陀仏釈迦仏十方恒沙諸仏一立二信心一立二宗義一故。極二仏果一判宗

（『西全』一、三六五頁上）

と言って、仏果の上に信心を立てるのは浄土宗だけであることを強調するのである。特に、『無量寿経』と『観経』の関係は、『観門義』巻第二に次のように表現されている。

信弘願故。可信要門也。此則要門開於弘願還顕弘願故信弘願弥可信要門要門真実要門故也

（『西全』三、三二四頁下）

ここで要門とは『観経』の三福九品定散二善を言うが、ここに弘願を信じることによって真実の要門を信ずべきことが述べられている。また『同書』では『観経疏』の深心釈に『阿弥陀経』を引いて述べている部分を指して、

此中仏語者文指阿弥陀経義在観経意帰大経

（『西全』三、三二六頁下）

と言い、三経の関係を述べている。

それでは具体的に、証空は本願と三心の関係をどう見ていたのであろうか。基本的には同一視していることが『観経散善義他筆鈔』（以下『他筆鈔』）巻上の

以本願至心信楽欲生我国為今経三心体故。至誠心当至心深心当信楽回向

（『西全』五、三一八頁上）

発願心当二欲生我国一

という言葉からわかる。

しかし、完全に同一視というのは当たらない。それは本願の三心が『観経』の三心の体であると見ている点である。

証空は至誠心釈（『西全』五、三〇六頁）において、仏の凡夫摂取の真実心を衆生の至心信楽の心であるとし、その心を衆生から見れば自利真実、仏に約せば利他真実となると言う。

さらに、

今此至誠心　為レ顕二真実心云心体一引レ之故云二皆是真実心中作一也。此即本願云二
至心信楽欲生我国等一心也。第二心　為レ顕レ云下正凡夫成二出離一行弘願一行也上引レ
之依レ之下云就行立信等一分一別正助二行一此本願乃至十念体。正我等往生　故也

（『西全』五、一二二頁）

と言う。このように本願の三心は真実心の心の体に納まるとし、深心は本願の三心のみならず本願そのものを乃至十念という言葉に代表させて、体とする心であると読むことができる。このように証空は『観経』の三心を上位の概念として捉え、本願を信じる心もそこに集約されると考えたと見ることができる。